祭祀（さいし）遺跡・石仏山で伝統の祭り

集落に春を告げる 触れ太鼓の音

触れ太鼓を先頭に、新雪を踏みしめて進む

柿生の神道地区に伝わる「石仏山祭り」が3月2日に行われました。雪がうっすらと積もった朝、祭りの開始を知らせる触れ太鼓を先頭に、神職や氏子が石仏山を目指します。太鼓の音を聞いた氏子が合流し、約15人が一列になって雪道を進みました。山道を300メートルほど上ったところに「女人禁制」の看板が立てられています。神域に女性が立ち入ることはできません。ナタなどの刃物も持ち込めないことから、大きな木が生い茂り、昼間でも薄暗い空間が広がっています。前立と呼ばれる高さ約3㍍の巨石の前で祝詞を上げ、玉ぐしを捧げるなど、神事が行われました。

石仏山には社殿がありませんが、「像石（かたいし）神社」として信仰されています。前立は神社でいうと本殿にあたるものです。原始的な信仰の形を残していることから県の史跡に指定されています。

女人禁制となる結界に、しめ縄を張る氏子たち

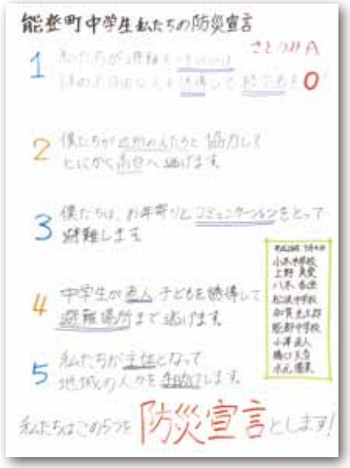
雪が降る中、豊作を願う神事が続けられた

地域に応じた「私たちの防災宣言」作成

中学生が地域防災の誓い

3月4日、能都中学校で防災学習会が開かれ、町内の4中学の17人が集まりました。生徒は事前に、自校でアンケートを実施していて、様々な考えを取り入れて「私たちの防災宣言」をまとめました。生徒の居住地に応じて「さとやま」「さとうみA」「さとうみB」の3種類が作成されました。

10日には生徒たちが役場能都庁舎を訪れ、作成した防災宣言を持木町長に報告しました。町長は「中学校の垣根を越え、思いやりあふれたすばらしい宣言です。町を引っ張っていく中学生になるよう期待します」と講評しました。宣言は能登半島地震が発生した3月25日まで、コンセールのとに掲示されました。



能登町中学生私たちの防災宣言

さとうみA

1 私たちが住む地域の特徴を知り、地域の人々と連携して防災力を0

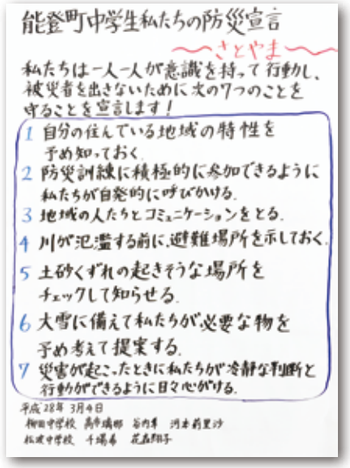
2 僕たちが近所の大人と協力して、にげる高台へ逃げます。

3 僕たちは、お年寄りとコミュニケーションをとって避難します。

4 中学生が大人、子どもを誘導して避難場所まで逃げます。

5 私たちが主体となって地域の人々を守ります。

私たちはこれからも防災宣言とします!



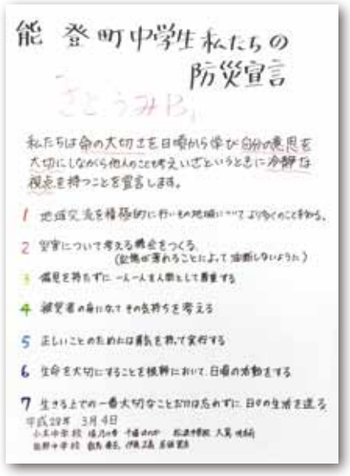
能登町中学生私たちの防災宣言

〜さとやま〜

私たちは一人一人が意識を持って行動し、被災者を出さないために次の7つのことを守ることを宣言します!

1 自分の住んでいる地域の特性を予め知っておく
2 防災訓練に積極的に参加できるように私たちが自発的に呼びかける。
3 地域の人たちとコミュニケーションをとる。
4 川が氾濫する前に、避難場所を示しておく。
5 土砂くずれの起きそうな場所をチェックして知らせる。
6 大雪に備えて私たちが必要な物を予め考えて提案する。
7 災害が起こったときに私たちが冷静な判断と行動ができるように日々心がける。

平成28年 3月4日



能登町中学生私たちの防災宣言

さとうみB

私たちは命の大切さを日頃から学び自分の意見を大切にしながら他人のことを考えいざというときに冷静な視点を持つことを宣言します。

1 地域災害を積極的に行いその地域について より学ぶことを誓う。
2 空室について考える機会をつくる。（記憶が薄れることによって油断しないように）
3 偏見を持たずに一人一人を人間として尊重する
4 被災者の身になってその気持ちを考える
5 正しいことのためには勇気を持って実行する
6 生命を大切にすることを精神において日頃の活動をする
7 生きる上での一番大切なことを忘れずに日々の生活を送る

平成28年 3月4日

生徒の居住地に応じて分けられた3班でそれぞれ作成した「私たちの防災宣言」

宣言書を手に笑顔を見せる生徒たち

災害ボランティアセミナー

災害に強い地域づくり学ぶ

町社会福祉協議会の防災・減災力向上災害ボランティア講座が2月21日、コンセールのとで開かれ、ボランティア従事者や住民など90人が参加しました。日本赤十字社石川県支部防災ボランティアリーダーの北村裕一さん＝金沢市＝が「地域から考える災害時の対応」と題して講演し、東日本大震災被災地救援活動を通じて感じたことを紹介しました。

避難者の気持ちは、時間と共に変化するため、変化に応じた対応が必要です。「気配りできず、不公平感が残った場合、人の繋がりが崩壊し、大きな傷跡になります」と避難所運営の難しさに言及しました。災害発生時には、警察や消防も対応に追われていて、被災者自身による犯罪防止の見回り活動なども必要となります。担い手不足など、普段の地域の課題が災害発生時に改めてわかることから、日ごろからの備えと、地域のつながりが大切だと話しました。子どもに対しては、大人の言葉が通用しないため「倒れてくるものに気を付ける」など、具体的に伝えることが重要であると強調しました。

救急法指導員の北村さんは、毛布を担架として利用する方法や、簡易トイレづくりを実演しました。

参加者は真剣な表情で耳を傾け、防災に対する知識を深めました。

「地域のつながりが大切」と話す北村さん